

中國出土資料學會
平成26年度第1回例会

日 時：平成26年7月12日（土）
受付開始 12：30～
研究報告 13：00～17：00

場 所： 成城大学 7号館3階 733教室 （東京都世田谷区成城6-1-20）
キャンパスマップ：<http://www.seijo.ac.jp/access/campusmap.html>

会場へのアクセス： 小田急線成城学園前駅北口より徒歩3分

報告Ⅰ 鈴木 舞（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC）

発表題目：殷墟青銅器の製作者－花東54号墓亜長銘の字形分析－

発表概要： 本発表は、殷後期の都・殷墟遺跡出土の同銘青銅器群の銘文に対して字形分析を行うことで、殷墟における青銅器製作者の構造を復元することを目的とする。従来、殷金文の研究は図象銘及び長文銘の内容に基づく方法が主流であるが、本発表では、殷金文、特に図象銘を、製作時の状況を反映する一つのモノとして捉えた。同一墓出土の同銘青銅器群は、同時代かつ同一環境下で製作された可能性が高い。今回は、殷墟花東54号墓出土亜長銘青銅器群を例に、亜長銘の中にも器種や用途によって字形の違いが見られることに着目し、これを製作レベルでの差異に読み替えることで、殷墟青銅器生産における分業のあり方について考察する。

報告Ⅱ 竹田 健二（島根大学教育学部教授）

発表題目：戦国時代における儒家の気思想

発表概要： 中国思想史において、気概念が重要な概念の一つであることは言を俟たない。もともと、伝世文献について見た場合、漢代以降の文献において見られる気はかなりの用例数があり、気に関する思考がまとまって存在すると見てよいと考えられるのに対して、戦国時代の諸子の思想を伝えるとされる伝世文献において見られる気は甚だ断片的で、気に関する思考は体系的ではないように見受けられる。このため、戦国時代における気に関する思考は果たしてどのようなものであったのか、或いはそうした思考はどのように成立し展開していったのかという問題は、なお十分には解明されていないように思われる。

周知の通り、戦国時代の思想の検討に用いることのできる新出土資料の中には、気を説くものが少なからず存在する。そこで本発表では、戦国時代の儒家思想を中心として、伝世文献である『論語』・『孟子』・『荀子』において散見される気に関する思考を踏まえながら、郭店楚簡・上博楚簡等の新出土文献における気に関する思考について検討を加える。

報告Ⅲ Andreini, Attilio（艾帝）（ヴェネツィア大学副教授）

発表題目：釋“𠄎” 關於上海博物館所藏竹書《恆先》的一些問題

発表概要： 上海博物館楚竹簡《恆先》共有13支簡，510字，第3簡背面有“恆先”两个字的篇名。本文旨在分析研究竹簡《恆先》上的𠄎字，它涉及《恆先》所包含的有關宇宙的重要概念。

對𠄎字，學界觀點並不一致：李零、丁四新認為是“質”字、李學勤認為是“全”、廖名春、李銳、龐樸、邢文則認為是“樸”。那麼，到底是什麼字？樸？業？質？全？

☆参加費(資料代) 500円

☆非会員の来聴を歓迎します

☆例会終了の後、懇親会を行う予定です。ふるってご参加ください。

連絡先 (例会委員長)

〒270-8555

千葉県松戸市新松戸 3-2-1

流通経済大学教育学習支援センター (新松戸キャンパス) 富田 美智江

Tel : 047-340-0057

Fax : 047-340-0068

E-mail : tomita-michie@rku.ac.jp

